

現状映す一本松の温度差〈駐在記者が語る被災地〉

朝日新聞 2013年1月1日

杉村和将（岩手・大船渡）

周囲に無数の木の残骸や壊れた建物があり、立つだけで津波のすさまじさを感じる。一本だけ残った岩手県陸前高田市の松がなぜ「奇跡」と呼ばれるのか。赴任した昨年9月1日、初めてその意味を実感した。

それから保存処理のために伐採されるまでの12日間、涙を流す人を何人も見た。話を聞くと、初めて被災地を訪ねた人が多い。ここで起きたことを思い、こみあげるものを抑えきれない人たちだった。

ところが、地元の人たちの会話で一本松が話題になることは、ほとんどない。関心は住まいや生活を取り戻すことに集まり、松の木のことを考える余裕はないのだ。

赴任して4カ月。この外と内の温度差をずっと感じてきた。赴任する前までは、一本松は人々の心の支えで、誰もが足を運ぶ場所だと勝手に想像していた。だが実際は、震災後に訪ねたことがないという人は少なくない。この温度差こそが、被災地の現状なのだと思うようになった。

一本松は2月、モニュメントとして戻ってくる。いつかこの木を、地元の人たちも心に余裕を持ち、穏やかな気持ちで眺められる日がくると信じている。